

疎外される空間とアート

——ニュータウンにおけるパブリックアートの功罪——

古 池 嘉 和

1. はじめに

日本の地域社会の変容は、戦後著しいものがある。高度経済成長に伴う労働力の大都市集中の必要性が、元来、土着的・伝統的な村落共同体から、都市部へと人々の流入を加速させた。このようにして、人々が浮遊する都心空間においては、——それが極めて匿名性の高いものであれ——「柵を捨て浮遊する共通性・共同性」の中で新たな共同体を形成する。しかし、都市部への人口集中過程で、共同体としての場との繋がりもなく、また都心コミュニティのように浮遊することも許されない集団が生まれてきた。その代表例が郊外型ニュータウンである。

つまり、都心部で形成されるコミュニティからも、地域社会の土着的なコミュニティからも、二重に疎外されている空間として「ニュータウン」が登場してきたのである。

このようなコミュニティは、土着性を否定することが求められ、本来、一つのコミュニティが有すべき陰部を限りなく隠蔽した。そのための空間表現としては、表面的な清潔さを求め、場との関係性を限りなく希薄化・無意味化することで、担保しようとした。

一方表面的な無機質さを補うべくして登場した彫刻などのパブリックアートは、表面的にデコレートするために用いられた「装飾技法」として、ニュータウンで盛んに取り入れられるようになった。しかし、本来、パブリックな空間に設置されるアートの役割は、場との関係性を希薄化するコミュニティにおいて、表面的な飾りとして機能するのではなく、むしろ、場との関係性——従って土着性——をより強く意識させていくための方法でもある。

実際、パブリックアートの社会的役割も、徐々にその方面へとシフトしている。その事例として、土着的な繋がりが見えやすい伝統的共同体を中心として、幾つかの実験的な試みが行われているが、土着性が希薄なニュータウンにおけるパブリックアートの役割も同じ地平を共有するはずである。

このようにコミュニティからの支持がなく、都市において無秩序に設置される「彫刻公害」と揶揄されるアートの本来的意義を、「ニュータウンという特殊なコミュニティ」での役割に照準を合わせて考察し、パブリックアートの役割を明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究方法

研究方法は、主として事例研究による。実際に事例調査を行ったのは、以下の事例である。

①都市部のニュータウンでのパブリックアートの現状を見るために調査した事例

- ・ファール立川（東京都立川市：1997 年）

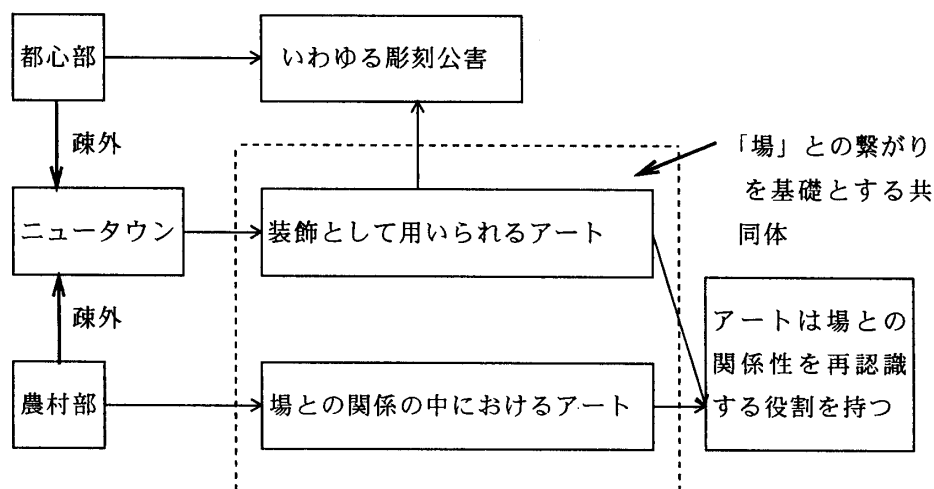
②ニュータウンコミュニティと比較対照するために、村落共同体的コミュニティにおいて行われている屋外アートイベント事例

- ・白州アートキャンプ（夏フェスティバル）（山梨県白州町：1995 年）
- ・鶴来現代美術展（石川県鶴来町：1995 年）

3. 研究仮説とフロー

本研究では、ニュータウンコミュニティの健全化を図っていくためには、場との関係性をコミュニティとして再認識していくことが必要であるとの仮説に立脚している。つまり、社会学的にアートを見た場合、共同体との関係性の関数となっているというのが本研究の仮説である。そして、場との関係性の深い土着的なコミュニティにおいて展開されているパブリックアートの事例を整理することで、ニュータウン型コミュニティを逆照射し、希薄化する場との関係性を取り戻すことで健全化を促進していくことが重要であると考えている。そのことにより、一つの疎外要因を取り除くことができると考えている。従って、まず本研究では、ニュータウンの位置づけを地域社会の歴史的変容の中で再整理し、一方で、パブリックアートについても、メディアでの取り上げられ方に基づいて、役割の変化の過程を整理する。その上で、土着的コミュニティにおいて行われているパブリックアートの事例を整理する中から、パブリックアートの本来的使命を浮き彫りにする。さらに、ニュータウンという空間の中で、パブリックアートが果たすべき本来的使命をどのように展開できるのか、その具体的方策について考察する。

□研究フロー



4. 地域社会におけるコミュニティ変容とニュータウンの位置づけ

日本における地域社会（コミュニティ）は、その近代化のプロセスの中で、二つの大きなエポックを経験している。明治維新と第二次世界大戦である。その近代化のプロセスは、端的に言えば、コミュニティにおける土着性、つまり土着的な風習・風俗等の——少なくとも表面上の——否定の過程である。

特に、第二次世界大戦敗戦後の日本は、経済的な復興を目指し、土着性を残しながらも先進国としての体裁を整えていった。このような二重性は、日本のコミュニティを大きく特徴付けることになる。即ち、地域社会（場）との繋がりを基盤とした土着的コミュニティではない新たなコミュニティの形成を見たのである。

その代表的な例を「ニュータウン」に見ることができる。戦後の日本の経済成長に伴い都市部に労働力が集中し、ニュータウンは、そのような人々に対する住宅地として出現した。このような人々の集合体は、当然ながら地域性を否定した共同体、稀薄な繋がりが少ない透明な共同体である。

つまり、かつての村落共同体のように、第一次産業を基盤として場と密接に繋がっている伝統的地域社会とは明らかに異なる原理により形成されたコミュニティは、必然的に共同体的な結びつきからは疎外された空間となる。

ここでのライフスタイルは、均質である。ステレオタイプの人々が、ステレオタイプの生活を送るコミュニティは、伝統的なコミュニティの概念では計り知れないものである。つまり、場とのコミュニケーションを断絶（ディスコミュニケーション）した関係性の希薄なコミュニティである。そこでは、場と密接にリンクしたコミュニティではなく、場とは基本的に無関係なコミュニティとなっている。整然とした無機質な空間は、住むために特化されたものとして提供され、土着的なものは徹底的に否定された場であることを要求される。

しかし、一方で、そこで居住する人間は、整備する側が望むような、画一的で整然とした環境に完全に同化できる機械的な人間像ではなく、多くは伝統的・土着的な共同体から移住した人々である。従って、このような人々の集合体である「ニュータウン」において、新たなコミュニティ活動が積極的に展開されている例もすくなくない。これらは、自治体の政策としてコミュニティ行政が強く叫ばれた時期と共振している。また、「6」で考察するように「パブリックアート」が一般的に認識されてくる時期とも共振する。つまり、ニュータウンという空間における人間性を回復するための手段として、一方でソフトな施策（コミュニティの行事や、ニューズペーパーの発行等）として強化されるとともに、空虚な町を彩る手段即ちハードな施策としての「パブリックアート」が導入されてくることとなる。しかし、一方での住民相互のコミュニティ活動は、共通の基盤が無く形骸化し、他方での空間におけるアートの導入は単なる装飾にすぎず、ニュータウンが内包する「病理」の根本的解決にはなんら寄与しなかったのである。

5. 地域を舞台とするアートの系譜

パブリックアートは、地域社会（場）やコミュニティ（共同体）との関係性を強く意識したアートであることがその本来的な役割ある。しかし、パブリックな空間にアートが見られるようになったのも、また本来的な役割が認識されてきたのも歴史的には浅い。パブリックアートという言葉が流布したのは、昭和 60 年代であり、その先駆的な事例として「千里ニュータウン」における広場のアイテムの一つとして彫刻が登場する。「4」で見たようにニュータウンという場（土着性）と遊離した共同体において、アートが取り入れられたことに、実に大きな問題が内包されているのである。

しかし、パブリックアートが一般的に認知されたのは、1980 年代半ばからである。特に、80 年代における都市開発ブームと文化行政の活性化、バブル経済を背景とした企業の文化活動への参画などにより、都市とアートは充分なコミュニケーションを経ることなく、結びついてしまった。

ここでは、そのことを明らかにするための一つの指標として、新聞記事に取り上げられた「パブリックアート」の記事件数で見る。

□新聞・雑誌におけるパブリックアートの掲載件数

研究フロー	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
朝日新聞	0	0	0	0	1	0	0	1	1	8	5	5
日経(新聞雑誌)	0	0	1	0	1	2	2	1	9	7	12	13
計	0	0	1	0	2	2	2	2	10	15	17	18

記事の量的な面で言えば、ここ数年議論が噴出してきただけといえるが、問題はその質的な変化である。具体的な表題からその変容過程を見てみると、当初は、パブリックな空間を彩るものとしての評価が多かったが（「環境彫刻十選(87.01.10)」「国道の落石護壁に民話の主ひょっこり 景観に潤い(1993.02.18)」「広告ではありません 豊前でパブリックアート 89(1989.08.21)」「新しい街、パブリックアートで表情 弾む色彩、雰囲気楽しく(1995.06.13)」「パブリックアート—都市の「機能」にも一役(1994.10.27)」等）、その後、設置することに対する疑問が起きてくることとなる。いわゆる「彫刻公害」が問題となった時期である。「埋没する「不幸な」彫刻（アートが街にやってきた：2）(1997.01.18)」「パブリックアート、雑踏に埋もれ幸せ？(1997.02.06)」など、パブリックアートに対する認識も明らかに変化してきている。このような変化を象徴するものとして、1994 年に「パブリックアート研究所—公共空間に芸術作品を（メセナ）(1994.07.24)」として評価していたパブリックアート研究所は、1996 年には一転して「パブリックアート研究所、「パブリックアートは街に必要なか」を開講(1996.01.15)」のような批判的な立場になる。1995 年前後を境とした時期が一つのターニングポイントであるといえる。

さらに、その後は設置のプロセスが重視されてくるようになる。つまり、ここで初めて地域（場）

やコミュニティ（住民）との関係性が意識されはじめるようになる。「パブリックアート変革期—地域に溶け込む手段模索、住民の理解が必要（文化）（1996.11.25）」「パブリックアートを住民の手に 塩谷陽子氏・エクノア・ハートニー氏（1997.02.18）」。

上記の流れは、地域とアートとの関係性が徐々に深まっていく過程を表している。この関係性は、地域とアートとのコラボレーション（協働）として捉えることができる。

つまり、設置する際において、如何に地域との協働作業が行われたかということが問われるようになってきている。

6. パブリックな空間、共同体とアートの関係性について

6-1 パブリックな空間におけるアート（パブリックアート）の定義

地域、特にコミュニティを司る行政側から見ると、地域共同体と地域住民の繋がりを強化し、特定の場（地域）に居住することに対する意義・意識を醸成することは、健全なコミュニティを育成・形成するために必要なこととなる。このような認識の元で開催されるアートイベントも多くなってきていると思われる。

一方、アートの側でも、地域社会や地域環境との関わりの中での表現行為を強く意識するようになった。サイト・スペシフィックアートなど環境と一体化したアートや、社会問題と深くリンクしたジャンクアートなど、多様なジャンルのアートが社会との接点を求めている。ここでは、このように地域社会や地域環境とのオープンな関係の中で成り立つアートを「パブリックアート」として総称することとする。

6-2 共同体との関係性

「6-1」で定義したパブリックアートの共同体との関係における役割は、「5」で言及したように、共同体と地域社会の双方向なコミュニケーションを行う媒体ということである。

つまり、共同体の中でのアートの役割は、共同体を構成する場としての地域とアーティストが共同作業を行いながら、双方向のコミュニケーションを図ることで、互いの信頼関係や共同体意識の醸成、共同体の存立基盤となっている場への理解や愛着の強化などが重要な要素となると考えられる。

これらを検証するために、実際に制作プロセスに共同体との深い関係性を築き上げている「白州アートキャンプ」と共同体のボランティア上で成り立っている「鶴来現代美術展」を例に上げ、アートと共同体の関係性について次章で考察する。

7. 場とコラボレートするアート事例

村落共同体のような場との関係の強い伝統的なコミュニティにおいて、近年いくつかのアートイベントが行われるようになった。コミュニティの基盤となっている「場」や「人」との繋がりの強い伝

統的なコミュニティにおいてもなお、アートを媒体としたコミュニティ確認作業が求められる時代である。

また、地域との結びつきが比較的強い、伝統的なコミュニティにおいては、場との関係性の強い作品を、地域の人との共同作業の元で行うことは——場との関係性の希薄なニュータウンのようなコミュニティと比較すれば——容易であると考えられる。

ここでは、その代表的な事例として「白州アートキャンプ」と「鶴来現代美術展」を取り上げ、地域社会（場）とコラボレートするアートの役割について考察する。

7-1 白州アートキャンプ概要

①白州アートキャンプの概要

□開催地の概要（調査年次 1995 年）

開催地 山梨県北巨摩郡白州町横手・大坊地区他

地形等 八ヶ岳と甲斐駒が岳に囲まれた風光明媚な場所

開催期間 7月8日（土）～8月27日（日）

フェスティバル 8月24日（木）～8月27日（日）

□開催内容

サブタイトル「芸能と工作・大地との共存 舞踏・芝居・音・美術・建築・映像・援農」

サブタイトルに示すとおり、パブリックアート設置だけではなく、フェスティバル期間中に白州を舞台に様々な内容のイベントが開催される。

例えば、ワークショップ、コンサート・舞踏、シンポジウム、大道芸などが、会期中、時間・場所を変えて頻繁に行われる。

②白州アートキャンプにおける共同体との関係性

概要でも示した通り、白州アートキャンプでは、野外美術展だけがプログラムされているわけではないが、野外美術に対する考え方がこの祭のあり方を規定していることは事実である。この祭における、野外彫刻（パブリックアート）は、ある設定された空間が用意され、そこに作品を置くという、場所も作品も制度に組み込まれた形式の野外彫刻展ではない。

野外彫刻は、あらかじめ割り当てられた区域に設置するのではなく、田畑や林の中など白州町民が日頃労働を行う場所に、自らの制作の場を見出し、土地所有者の了解を得ることが前提となっており、そこで農夫のように制作活動を行う中で初めて可能となるのである。そこで、地域のコミュニティとの多様なコミュニケーションが繰り広げられ、その過程を通じて作品は地域に設置されるのである。

また作品の中には、きびしい自然に晒されて崩壊したものもあれば、地主との関係で撤去を余儀なくされた作品もある。きびしい自然の中で、翌年も鑑賞者の前にその雄姿を現すのは、作者と大自然が織りなす共同作業である。そこでは、作品を通じて人間のささやかな営みや大自然の持つ生命力など人間と自然（環境）との関わりなどについて再考を促している。

自然を含めた環境と芸術を通してのこのような活動が、伝統的共同体の中でしか成立しないということはない。ニュータウンであろうが伝統的な共同体であろうが人間の営みと自然との関係、自然に対する畏敬の念、設置する場所との関係性などを考慮しなければ、美術館の中の作品を野外に設置したものにすぎない。

7-2 鶴来現代美術展

①イベントの概要

□鶴来現代美術展の概要（調査年次 1995 年）

実施期間；1995 年 7 月 15 日～ 30 日

実施場所；石川県石川郡鶴来町内各所

主催；鶴来町・鶴来現代芸術祭実行委員会

主催；鶴来商工会青年部

概要；商工会青年部の「町の資源を見直す活動」のひとつとして、海外アーティストの滞在制作、街空間を国内の若手アーティストの作品発表の場にするアート・ストリート、町の伝統産業の職人とアーティストが交流するアート・クラフトワークショップ、子どもふれあい工房などを開催。特に滞在制作は、青年部の人々の制作協力によって行われている。

②鶴来現代美術展における共同体参加の態様

鶴来現代美術展を実際に見てみると、実に多くの地域の人々が支えていることがわかる。特に、プログラムの中でレジデンス形式で制作する方法がこのイベントの性格を規定している。

まちの至るところで、実際の生活スペースが展示スペースとして提供されているという空間的な面は勿論、まちの青年部を中心に実に多くのボランティアが参加している。制作するアーティストとの心理的一体感が醸成されているため、共同体の記念碑としての作品づくりが実に色濃くなっているイベントである。

8. 伝統的共同体における共同体との関係性

白州での事例は、農村を舞台としているが「都市を逆照射する」という題名が示すように視線は、都市の均一的な空間へ投げかけられているようでもある。

都市空間においては、農村空間よりも一層「場」の意味が見えにくくなっており、場は文字どおり「作品の設置する場」としての意味しか持たないことが多い。しかし、いかなる空間であれ、その場の持つ意味やその場で生きてきた人々、その場で起きた事象、環境等とコラボレートしていくことが必要となる。そのためには、その場を核とするコミュニティとのコミュニケーションを図り、意味を探る段階を経過することが求められる。

ここでは、白州アートキャンプにおいて具体的にどのような過程を通じて、共同体との関係性を高

め、共同体からの信頼を得られたのかについて整理する。

8-1 白州アートキャンプにおける共同体との関係性

白州アートキャンプにおいて、土地の住民（土地所有者、農夫、周辺住民）や場（土地自体）の持つ民族的、文化的な事象、環境との共同作業の上でいかに作品が成立しているのかについては、下記の3つの視点で集約することができる。

- ① 予め割り当てられた場所に設置するのではなく、土地所有者との話し合いや、農作業を通じての農民とのコミュニケーションなどが前提となっている。
- ② 偽善的な営為ではなく、本質的な一体感を得、心理的にコラボレートした状況を創出（地主や農民の信用を獲得するために、舞踏家の田中泯氏自ら土地を穿ち岩盤を割り貫いて20 mの井戸を掘り、水を得たことが象徴的な事実である）している。
- ③ 激しい自然環境に晒され朽ちていく作品や自然の中で風化していく作品があるなど自然環境（場）との関係性に深く関わっている。

9. 疎外空間におけるパブリックアートの今日的役割

前章までで考察した通り、共同体は、その社会的経済的環境変化の中で変容を遂げてきた。その変遷過程と共振するように、アートの社会的役割も変化してきた。

地域共同体の中でアートがどのような役割を持ちうるのか、またニュータウンのような「場との関係性が希薄化した疑似共同体空間」で、アートがどのような役割を果たしているのか、また、果たすべきなのかがここでのテーマである。

9-1 疎外された空間において疎外されるアート

場と隔絶されたコミュニティにおいて、浮遊する人々にとって場と繋がるアートは重要なファクターとなる。つまり、場とコミュニケーションする最後の手段としてアートが用いられるのである。多くのニュータウンにアートが出現したのは、実に必然性のあることである。だが、そこで設置されたアートは、ニュータウン的原理とも言える、「場との関係性を否定した単なる装飾物」に過ぎないものがほとんどであった。このようにまちづくりに導入されたアートの代表例として、ファーレ立川（東京都立川市）をあげることができるが、作品の完成度はともかく、アートが設置される場と共振することなくまちをデコレートするファクターとしての機能を脱却することができない。

実際、ファーレ立川に置かれた作品を作品として見た場合、その完成度の高さに対する評価とは裏腹に、現地に立ち並ぶ高層建築群の中でのアートが、空間から疎外され孤立している。ファーレ立川のアートプロデューサーである北川フラム氏が「ファンクション（機能）をフィクション（物語）に変える」と語るように、機能性を追求した空間においてアートが完全に異質なものとして出現しているため、アートは空間からもまたその構成員たるコミュニティからも疎外されている。つまり、社会

学的に見て、アートは全く機能していないということである。

場との関係性を否定し、歴史的連続性が希薄なニュータウンの中で、場との関係性を結びつけていくことは、伝統的な共同体空間と比較して——特にビジュアル的な面において——困難であることは事実である。従って、その際に重要となる要素は、制作過程における空間を構成する構成員（コミュニティ）との繋がりやの深さにあると考えられる。その関わりの深さから、共同体のモニュメントとしての存立基盤が形成されるのである。

9-2 疎外空間におけるパブリックアートの今日的役割

前章までで考察してきたとおり、ニュータウンを代表とする機能的に整備された、しかし立脚する場からは疎外されている空間におけるパブリックアートの役割は、希薄な共同体に歴史的な文脈を持つ「場」と結びつけることによって、共同体としての定位を与えることである。その共同体のシンボルとして、ビジュアルな表現である作品が設置されることである。つまり、パブリックアートの制作過程を通じて、自ら生活を営む場とコラボレートした共同体の記念碑としての役割を持つことである。

それは、共同体が場との繋がりを常時再認識するためのシンボルとして機能することになる。このような意味でパブリックアートを整備していくことが必要であるが、そのためには「9-3」で示すようなプロセスを通じたものとなることが必要条件となる。

9-3 共同体との関係性を強化する具体的方策

ニュータウンのように新たに作られたまちであっても、歴史的な文脈の延長線上に現在がある。その土着性を完全に否定することはできない。しかし、むしろそのことを隠蔽することがニュータウンの質を向上させると考えられてきた。逆にここでのアートの役割は、その土着性を再現することで、場との関係性のある共同体に再編することである。つまり、共同体と場との間でディスコミュニケーションされている回路を結びつける役割を持つものである。整然と整備された空間を心理的に掘り返し、その場における歴史的な文脈や固有の文化について、共同体の確認作業を行うことが必要となってくる。

その媒体として、アートが有効となるのである。ニュータウンという、場との関係性を——少なくとも表面上は——否定した場においては、目に見えにくいのが故に困難な面はあるが、伝統的な共同体において行われているような、場と深く関連づけられたアートを制作するプロセスをイベント化することも必要であろう。そのため、以下のようなプロセスを制作プログラムの中に内包しておくことが重要である。

逆説的に言えば、以下のプロセスがないパブリックアートは、いかに完成度の高い作品であっても、アート側とニュータウン整備側の自己満足の域を脱することはない。

つまり、以下のような具体的な制作プロセスを通じて、共同体から支持されるような、また逆に希薄な共同体を強化していくようなアートの役割が求められるのである。

□共同体との関係性を深めていく制作プロセス

- ①作品を制作するアーティストの地域への滞在（アーティストインレジデンス）
- ②場の歴史的文脈の掘り起こしのための共同研究（地域住民とアーティストのコラボレーション）
- ③地域住民のボランティアによる制作補助（地域住民の制作参加方式による信頼関係の確立）
- ④場との繋がりを表現する制作活動（アートを媒介した場と共同体のコラボレーション）

む す び

都市空間が人間（そしてその集合体としての共同体）を前提としている限り、それを計画する側の視点としては、そこで生活を営む人の立場を離れることはできない。

本編でも繰り返し述べたように、人と場との関係は、人々の日常に定位を与える上で重要である。都心のような場との関係性を希薄化し浮遊することで成り立つ共同性を例外とすれば、日常の生活を行う空間では、場との関係が希薄することにより様々な病理をもたらすことになる。

阪神大震災の後に行われた区画整理の説明会の中で、一人の老婆が説明者に投げかけた素朴な疑問である「お地藏さんはどこにあるのでしょうか」という言葉に大きな真理が内包されている。

もはや疎外された空間において、パブリックアートしかそれを救う手段はないのではないか。そのためにも、共同体や場との関係を強く意識した中で、アートを捉えていくことが必要である。

参考文献（順不同）

- 季刊 アステイオン No. 45
- 武蔵野美術 No. 100
- TRUST フランシス・フクヤマ
- 橋本敏子 地域の力とアートエネルギー 学陽書房
- 衛 紀生 芸術文化行政と地域社会 テアトロ
- アルビントフラール 文化の消費者 勁草書房
- パブリックアートの実験 愛知県文化情報センター
- 百年MANDARA 愛知百年会議
- 美術手帳 Vol. 44 No. 650
- 美術手帳 Vol. 44 No. 661
- 宮台真司 まぼろしの郊外 朝日新聞社
- 宮台真司 新世紀のリアル 飛鳥新社